
三剣士の過去

川口高史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三剣士の過去

【Nコード】

N2783N

【作者名】

川口高史

【あらすじ】

これは、三剣士こと川口剣汰、川口高史、桜井春花の、今（雑誌劇場出張版）に至るまでを綴った伝記である。

三剣士の過去を知りたい、という方のみどうぞ。

第一章 離れ離れの先の出会い

今から16年前：

とある世界の日本の、とある場所。

そこに、宇宙から、突如「ゼットン軍」が襲来した。それを迎え撃つたのは、二代目三剣士。

二代目三剣士は辛くもゼットン軍を退けたが、三人とも行方不明になっってしまう。

それにより、彼らの子供たちも、散り散りになってしまった。

もちろん、山口剣汰、川口高史、桜井春花…後の三代目三剣士でもある。

剣汰は、ゼットン軍が襲い来る前に父から託されていた「豪竜胆」と一族の財産の三分の一を手し、一人さまよっていた。

高史は、逃げている途中で実の兄とはぐれ、一人さまよっていた。春花も逃げている途中で姉とはぐれ、一人さまよっていた。

ゼットン軍による被害のせいで、三人を助ける暇など、誰にもなかった。

高史はさまよう中、一人のメイド服姿の女性に出会った。

そしてその女性は、高史を主と決め、光に包まれて、剣に姿を変えた。

その剣こそ、後に高史の最大の相棒となる、「ブラスタースブレード」だった。

一方の春花は、さまよう中で対人恐怖症に陥ってしまう。

誰に声をかけられても、ただただ怯え震えるだけ。

そして剣汰は、そんな高史と春花を「拾った」。

高史は少しずつ懐き、春花も最初こそ怯えていたが、次第に心を開き、懐いた。

そして、高史が川口の間人だと知った剣汰は、己の姓を「川口」と変え、高史を弟とした。

そして、春花が桜井の間人だと知ると、剣汰は高史と春花を従え、三代目三剣士となることを決意した。
いつまた、敵が来ても戦えるように…

そして、三年後…

川口剣汰、13歳。

川口高史、10歳。

桜井春花、7歳。

彼らの…三代目三剣士の戦いが、始まった…

第二章 戦いの始まり

ゼットン軍の襲来から三年後：

来るべき戦いに備え、剣汰は豪竜胆を、高史はプラスターブレードを使いこなしていた。

春花も、剣汰が持っていた「ラルク変身セット」を受け取り、その力を使いこなせるようになった。

そして、時は来た。

突如現れた敵、デスキルバンデスが、バルタン星人軍を取り込んだ「クロー軍団」を率いて、攻撃を開始したのだ。

それに対して三代目三剣士は、蓄えてきた力を振るい、クロー軍団に立ち向かった。

クロー軍団が次々と送り込む「バルタン兵士」を、剣汰たちは次々と斬っていく。

そして、バルタン兵士を指揮するクロー軍団司令官にしてバルタン星人軍四天王の一人、カラムティアバルタンや、その相棒となったクロー軍団幹部、シザースンと戦い、これを退ける。

剣汰たちは、これを来る日も来る日も繰り返した。

そして、時々現れる、デスキルバンデスのペットにしてクロー軍団の最高幹部、ギガノゾーアや、クロー軍団のボス、デスキルバンデスとも戦って負け、実力の差を知った。

そんな戦いが続く中、第三勢力が現れた。

マクータが率いるバイオニクル軍団、「マクータ軍」である。

マクータ軍は三剣士ともクロール軍団とも敵対し、三つ巴の戦争が始まった。

第二章 戦いの始まり（後書き）

補足 クロー軍団幹部の容姿

カラミティアバルタン：手が五本指になったコスモスのネオバルタン
シザースン：クウガのゴウラムが直立した姿

ギガノゾーア：ティガのガタノゾーア

デスキルバンドス：ガイアのビゾーム

第三章 新たな力、目覚めた力

デスキルバンデス率いるクロー軍団。

マクータ率いるマクータ軍。

そして、剣汰の率いる三剣士。

この三つの勢力による三つ巴の戦いは、一進一退の攻防を繰り返していた。

しかし、ある日、戦局が動いた。

クロー軍団が、空中戦艦「ダーククローウイング」を完成、実戦投入したのだ。

ダーククローウイングの戦闘力は、三剣士はもちろん、マクータ軍すら圧倒した。

クロー軍団は瞬く間に優位に立った。

しかし、それでも三剣士は諦めなかった。

なぜなら彼らは、既に一度、家族と身寄りを失うという「絶望」を乗り越えていたからだ。

そしてその諦めない心が、再び戦局を動かした。

高史のブラスタースブレードに秘められていた「刃の光」が覚醒し、高史は、刃の巨人、ウルトラマンブレードに変身できるようになったのだ。

それに続いて、剣汰の前に「剣の光」が現れて豪竜胆に宿り、剣汰はウルトラマンソードに変身できるようになった。

更に、剣汰が今や誰も住んでいない実家を訪れると、そこには山口家秘伝の術の書と、カイザドライバーがあつた。

剣汰はその秘伝の術の書を読み、練習の末、新たな技「千鳥」と「雷切」を会得し、高史は剣汰からカイザドライバーを受け取り、仮面ライダーカイザに変身できるようになった。

また春花も、新たな必殺技「ファイナルエレメントスラッシュ」の存在を知り、練習の末、それを会得した。

これにより、三剣士とクロー軍団は互角となったが、マクータ軍は徐々に劣勢となつていった。

しかしそこで、新たな勢力が現れた。

三剣士の知り合いで、「人類史上究極のバカ」と賞されていた男、カモンが、闇の力に飲み込まれ、ダークカモンに変貌した。

そしてダークカモンは、世界の裏にひっそりと存在していた「暗黒世界」に潜んでいた、ダークヴィジュエル、ガイガン、ネオガイガン、カオスサンドロスを配下として、「ダークカモン軍」を結成した。

ダークカモン軍は、クロー軍団やマクータ軍と違って兵を持たなかったが、ダークカモンを始めとする個々の実力が強大で、三剣士、クロー軍団、マクータ軍を次々と圧倒した。

三つ巴の戦いは四つ巴となり、更に激しさをますのだった。

第三章 新たな力、目覚めた力（後書き）

補足 ダークカモン軍の容姿

ダークカモン：無双OROCHIの織田信長

ダークヴィジュエル：超星神グランセイザーのセイザーヴィジュエルが黒くなった姿

ガイガン：ゴジラ FINAL WARSのガイガン

ネオガイガン：ゴジラ FINAL WARSのガイガン（パワーアップバージョン）

カオスサンドロス：コスモスのサンドロスが黒くなった姿

第四章 決戦、マクータ軍

三剣士、クロー軍団、ダークカモン軍が一進一退の攻防を繰り返す中、マクータ軍のみ徐々に押されていった。

マクータ軍の刺客は三剣士に次々と倒され、残るはマクータの側近であるギガーク、メガーク、そしてマクータのみとなった。

そんな中、剣汰は遂に決断を下す。

「マクータ軍を、潰す。」

かくして、三剣士とマクータ軍との決戦の火蓋が切って落とされた。

マクータ軍も同様に考えていて、メガークがギガークと融合、ギガメガークとなって襲いかかるが、高史が等身大でウルトラマンブレードに変身し、激闘の末撃破した。

そして、マクータ軍の本拠地を突き止め、突入した。

その最深部で、マクータは三剣士を待ちかまえていた。

「…終わらせてやる、マクータ。」

「終わるのは貴様等だ。」

我が僕達の怨念を受けて滅びるがいい、三剣士共！

遂にマクータとの戦いが始まった。

しかし、剣汰達の二倍の巨体を持ち、今まで倒してきたマクータ軍の刺客とは比べものにならない力を持つマクータに、三剣士は苦戦を強いられる。

そして、マクータの猛攻の前に、とうとう倒れ伏してしまった。

「どうした…？この程度でこの俺を倒すとはざいていたのか…？」

「…まだに決まってるんだろ…！」

「…私たちは…負けない…！」

「…なら、これでどうだ…？」

マクータは映像を出した。

それは、マクータの兵であるボロツクの大群が、三剣士が住む街に進軍しようとしている光景だった。

「あれは…！？」

「…こいつらを一齐に進軍させれば、あんな街程度、ひとたまりもないだろう…！」

「…そんなの、単純な話だ…！」

そう言いつつ、剣汰は立ち上がった。

「…お前を倒した後、あいつ等も片付ける…それだけだ。」

「…ま、そうなるわな。」

「そうだよ…マクータも、ボロツクも…全部倒す…！」

「…貴様等はなぜ絶望しない…！？」

なぜこの状況でそんなことがほざける…！？

「…俺たちは絶望を知らないんじゃない。」

知ってるからこそ、しないんだよ…！」

高史と春花も立ち上がり、それぞれの武器を構えた。

「…ならば嫌がおうにでもさせてくれる…！」

やれえ！」

マクータが叫ぶと、ボロツクが一齐に進軍を開始した。それでも、三剣士はただ真っ直ぐマクータをみていた。

そして、それが奇跡を起こした。

ボロツクの大群が、あっという間に全滅させられたのだ。
それをやったのは…なんと、ダーククロウイングだった。

「何だと…!？」

「…デスキルバンデス…あいつ…」

ダーククロウイングのブリッジで、デスキルバンデスはボロツクの残骸を見下しながら呟いた。

「…さつさとマクータを潰せ、剣汰。」

三剣士の諦めない心が起こした奇跡、その一つは、デスキルバンデスの気まぐれだった。

そして、もう一つの奇跡が起こる。

剣汰の「剣の光」と高史の「刃の光」が光輝き、三剣士を包み込んだ。

「な…何なんだこの光は…!？」

「なんじゃこりゃ…」

「暖かい…力がみなぎってくる…!」

「…高史、春花…行くぞ!」

「うん!!」

「了解!!」

三剣士は、豪竜胆、ブラスタースタールブレイド、ソードラルクラウザーを重ね合わせて掲げ、叫んだ。

「セーバー……！！」

三人は一つとなって光になり、一人の光の巨人が光臨した。

その名は…聖剣の巨人、ウルトラマンセイバー。

「小癪なあああっ！」

マクータは二本の剣が付いた槍をふるうが、セイバーはそれを受け流し、マクータを蹴り飛ばした。

「ぐおおおおっ！？」

先ほどまでとは比べものにならない力で、セイバーはマクータを攻めていく。

「おのれええええっ！！」

「…これで終わりだ…マクータ！！」

セイバーは、必殺のセイバーストライク光線を放ち、マクータに命中させた。

「ぐあああああああ！？」

我は終わらん…必ず貴様等に復讐するぞ…三剣士共おおおお！

「！」

「…そのときは、また潰すまでだ。」

マクータは断末魔をあげて倒れ、爆発した。
これにより、マクータ軍は完全に壊滅した。

命がけの戦いを終え、満身創痍になりながら三剣士は帰還した。
それを察してか、それからしばらくクロー軍団もダークカモン軍も
現れなかった。

傷を癒やしながら、一時の平和を過ごす三剣士。

しかしある日、それは意外な形で破られた。

三剣士の前に、突如「時空の穴」が開き、三剣士の吸い込んでしま
ったのだ。

第五章 ピンチの先の出会い

突如として「時空の穴」に飲み込まれてしまった三剣士。その中をさまよう途中で、高史は剣汰、春花とはぐれてしまった。

そして気がつくと、高史は森の中にいた。

立ち上がり、自分とブラスターブレード、カイザフォンの無事を確認すると、ひとまず森を抜けるために歩きだした。

30分程歩いたところで、高史は一旦休んだ。

歩いても歩いてても、一向に森を抜ける気配がしないのだ。

3分程座り込み、立ち上がって再び歩きだそうとした、その時。

「…こんな所ではったりとはな。」

「…!？」

高史が声のしたほうを振り向くと、そこには、10体のバルタン兵士を率いたカラミティアバルタンが立っていた。

「カラミティア…!」

「…ここで会ったが百年目、というやつだろうな。」

カラミティアバルタンは、ダークホロスナイパーを抜き、構えた。それと同時に、バルタン兵士も戦闘態勢にはいる。

高史もブラスターブレードを抜いて、戦闘態勢をとった。

そして高史は走り出し、カラミティアバルタンに斬りかかった。

カラミティアバルタンはそれを容易くかわし、ダークホロスナイパーで高史を狙い撃った。

高史はそれをブラスターブレードで斬り弾き、襲いかかるバルタン

兵士を斬り捨て、再びカラミティアバルタンに斬りかかった。

しかしカラミティアバルタンは瞬間移動でそれをかわし、ダークホロスナイパーで高史の右腕を撃ち抜いた。

「ぐあっ！？」

しかし高史も、ブラスタースタールブレードをハンドブラスタースタールモードに変形させ、カラミティアバルタンの右肩を撃った。

「ぐっ…！？」

そして、残りのバルタン兵士を撃ち倒し、撃たれた腕を押さえながら森の奥に消えた。

「…逃がしたか…」

その直後、デスキルバンドスから帰還命令を受け、カラミティアバルタンはその場から消えた。

高史はブラスタースタールブレードを鞘に収め、腕を押さえながら森を進んでいた。

血が傷口から流れ、一向に止まらない。

「どこまで続くんだよ…この森…！」

そつつぶやいたその時、森の地面が変わった。
そう、森の中に通る道に出たのだ。

「道だ…！」

これを通れば…」

そう言っただけで歩きだそうとしたが、躓いて倒れてしまった。
倒れる前に姿勢を制御して、傷を負っていない方を下にしながら、高史は立ち上がることが出来なかった。

ここに来るまでに、想像以上に体力を消費していて、再び立ち上がる気力が残っていなかったのだ。

「く…そっ…立てよ…俺…！」

自分に命ずるが、体が言うことを聞かない。
とうとう高史は力尽き、気を失ってしまった。

そして目覚めると、視界に写ったのは、先ほどまで見ていた青空ではなく、天井だった。

そして、自分がベッドに横たわっていることにも気がついた。

「ここは…？」

俺は…誰かに助けられたのか…？」

そう思い、体を動かそうとした瞬間、右腕に激痛が走った。

「ぐあっ…！？」

まだ…右腕が…治っていないのか…」

考えてみれば当然だ。

恐らく、気を失ってから数時間しかたっていない。
たった数時間で傷か治るわけがない。

銃で撃たれた傷なら尚更だ。

その時、二人の少女が部屋に入ってきた。

「「あつ、気が付いたの!？」」
(いきなりハモった!?)

その少女たちのことより、二人がいきなりハモったことに驚いた高史であった。

「大丈夫？」

「大丈夫だったらとくに起き上がっとるわ。」

「そんな言い方しなくても……」

赤い少女が苦笑する。

「で、単刀直入だが、お前ら誰？」

「……たんとーちよくにゅーって？」

「ガキかお前等。」

「うっ、さつきからひどいよぉ」

青い少女が半泣きになる。

「で、誰な訳お前等？」

「私はファインだよ!」

「私はレインよ。」

「ファインにレイン……か。」

俺は高史、とりあえずよろしく。」

これが、異世界との初めての交流だった。

第五章 ピンチの先の出会い（後書き）

ということでは、ふしぎ星のふたご姫編、突入です。

第六章 行き着いた先は不思議星

時空の穴に飲み込まれ、剣汰たちと離れ離れになってしまった高史。カラミティアバルタンとの戦闘で傷を負い、倒れてしまう。そして気がつくと、高史はファインとレインという二人の少女に出会った。

「…とりあえず、ここはどこだ？」

「ここはかざくるまの国だよ。」

「…んだそのメルヘンチックな名前の国は。」

その時、高史ははっと気づいた。

（そっぴやここ別世界だったな…

ってことは…下手すりやここ地球ですらないのかも…

いやそれは流石に…いや…否定しきれん…

となれば…）

「なあ…ここ、何ていう星なんだ？」

「「えっ！？どうして知らないの！？」」「

（またハモった！？）

「あ…ちよつと話せば長くなる事情があつて…」

「事情…？」

「教えてくれたら話す。」

「わかった！」

ここはね、ふしぎ星っていうんだよ！」

（はい予想的中ー！）

「ふしぎ星…か。」

もう星自体メルヘンチックだなおい。

まあそれは置いといて蹴飛ばして、と。」

「何て蹴飛ばすの!？」

「そこは気にすんな。」

さて、事情だが…俺はこことは違う星、こことは違う世界から迷い込んできたんだ。」

「そうなの!？」

「ということは…迷子なの?」

「…まあ、そうなるな。」

飛ばされる途中までは仲間と一緒にだったんだが…はぐれちまっとな。」

「それじゃあ…その傷は?」

「この世界についた少し後に、敵にばったりしてな…戦って撃たれた。」

「大丈夫なの!？」

「まあな、誰かは知らんが、ご丁寧に治療してくれたおかげでな…」

「その傷は、3日程大人しくしていれば治るよ。」

一人の白衣姿の少年が、部屋に入ってきた。

「「コウジさん!」」

「…誰?」

「この人が、高史をここまで運んでくれたんだよ!」
「なるほどな。」

ところで…どっかでみたような…」

「…すぐに思い出せないのなら、人違いだと思うよ。」

コウジはきつぱりとそういった。

しかし、高史は見逃さなかった。

その時のコウジの表情が、一瞬だけ悲しそうに見えたことを。

しかし、自分自身コウジが誰か思い出せないので、深く詮索するの

はやめておいた。

その後、高史はコウジのもとでしばらく安静にすることで、持ち前の回復力の早さもあり、3日で傷が治った。

「…すごいね、こんなに回復が早いなんて。」

「どうも。」

「でも、もう少し安静にしておいたほうがいいよ。最低でも、今日1日。」

「了解。」

その時、外から悲鳴が聞こえた。

コウジはすぐさま外に出た。

そこでは、複数のバルタン兵士が、住民を威嚇しながら家に一軒一軒踏み込んでいた。

そのバルタン兵士を指揮しているのは、もちろん、カラミティアバルタンであった。

（まさか…高史を探しているのか…！？）

「…まったく…あんの野郎どもが…！」

そっついながら、高史がジャージの上を羽織って、ブラスタブレードを手に家から出てきた。

「高史！？」

駄目だ、いくら傷が治ったからって…」

「俺以外にあいつらとやり合える奴なんかいねえだろ…！」

高史はそのままコウジを押し退け、ブラスタブレードを抜いてバ

ルタン兵士に斬りかかっていった。

「…これ以上の手間が省けたな。」

カラミティアバルタンの指示で、バルタン兵士が一斉に襲いかかる。高史は逆手に持ったブラスターブレードで、バルタン兵士を斬り倒していく。

カラミティアバルタンがダークホロスナイパーで高史を狙い撃つが、高史はそれをかわしながら攻撃する。

「…下がれ、後は俺がやる。」

カラミティアバルタンはバルタン兵士を下がらせ、ダークホロスナイパーから光刃を出して高史とぶつかり合う。

今まで何度か対決してきたが、カラミティアバルタンの方が経験があり、その分強い。

高史は徐々に押され、体力を消耗していく。

「…一人は厳しいか？」

「…当たり前だ、いろんな意味で。」

カラミティアバルタンは、ダークホロスナイパーの光刃を、高史に向け射出した。

高史はそれを斬り弾くが、その隙をつかれてカラミティアバルタンに蹴り飛ばされた。

「がはっ!？」

「…所詮子供だ。」

カラミティアバルタンは、ダークホロスナイパーの銃口を高史倒れ

伏すに向け、トリガーに指をかけた。

その時。

「はああああっ！！」

二人の聲が高史の後方から聞こえ、その瞬間、カラミティアバルタンは斬りつけられた。

「ぐっ…！？」

その二人の正体は…

「…ようやく見つけたぞ、高史。」

「もう！どこ行つてたのよ！」

「…剣汰兄ちゃん…春花…！」

離れ離れになっていた、剣汰と春花だった。

第七章 合流と再会

傷を負い、ふたご姫とコウジという少年に助けられた高史。傷は治ったが、そこにクロー軍が襲来。

高史が一人立ち向かうが、カラミティアバルタン相手に苦戦を強いられる。

しかしそこに、離れ離れになっていた剣汰と春花が駆けつけた。

「まだいけるか？高史。」

「…当然！」

「それじゃあ…」

「…行くぞ！」

「うん！」

「了解！」

三剣士は、絶妙なコンビネーションで瞬く間にカラミティアバルタンを撃退した。

カラミティアバルタンが撤退すると、住民たちの歓声があがった。

「ふいー…助かったよ、二人とも。」

「まあ、無事でよかったわ。」

「…あなた方が、三代目なんですね。」

コウジが、三剣士に話しかけてきた。

「…なぜわかる？」

「…実は僕、あなた方と同じ世界の人間なんです。」

「…そうだったの！？」

ふたご姫が盛大に驚き、コウジは次に高史に話しかけた。

「…高史、僕をどこかで見たことがある、そう言ったね？」

「ああ…なんかひつかかるんだよね…」

「それじゃあ…川口浩司の名に、聞き覚えは？」

その名を聞いた瞬間、高史ははっとした顔になった。

「…思い出したみたいだね。」

コウジ…川口浩司がそう言った瞬間…

高史は浩司を思いつきりぶん殴った。（ただし、顔ではなく胸を）

浩司は大きく吹っ飛び、地面に墜ちた。

「…ええええええええええ！？」

春花とふたご姫が盛大に驚く。

流石の剣汰も啞然としていた。

「…今までどーこほつつき歩いてやがったボケ兄コラア。」

浩司は立ち上がって背中を払うと、

ダッシュしてその勢いのまま高史をぶん殴った。（こっちも顔ではなく胸）

高史も大きく吹っ飛び、地面に墜ちた。

「…この世界に飛ばされて医者見習いやってただけど何か文句あ

るかコラア。」

台詞の後半から声が高史にそっくりになっていた。

浩司の声は、よく聞くと高史とそっくりなのである。

高史は立ち上がり、浩司に詰め寄った。

「無かつたらぶん殴つたらんわボケコラア!!」

「そうか、じゃあもう一発いっとくかコラア。」

「上等だコノヤロウ、こっちは三発いったるかコラア!!」

「やめる。」

「すいませつしたつ。」

剣汰の一言に、高史と浩司、同時に土下座。

「それで…お前は何者だ？」

「そついえば、まだ名乗ってませんでしたね。」

僕は川口浩司、高史の兄です。」

「「ええええええええええ!!?」「」」

春花 & amp; ふたご姫、本日二度目の絶叫。

「それじゃあ…お前が高史の…」

「はい、血の繋がった、実の兄です。」

あなたが、剣汰さんですね。」

「ああ。」

高史と春花とで、三剣士になっている。」

その時、高史がおもむろに浩司に近づいた。

「…本当に…浩司兄ちゃん…なんだな…?」

「ああ、そうだよ。」
「…そっか…」

高史はそう呟くと、浩司に抱きついた。

「…会えて良かった…無事で良かった…！」

「…それは僕の台詞だよ、高史。」

大きく、強くなったじゃないか。」

「…まだ…弱いよ…さっきだって…」

「大丈夫、高史は強いよ。」

これから強くなれるよ、絶対。」

「…うん…ありがとう…浩司兄ちゃん…！」

高史は浩司から離れた。

その間に、剣汰と春花はふたご姫と交渉し、ふたご姫に同行することになった。

「浩司兄ちゃん…俺たちと一緒に…」

その言葉に、浩司は首を横に振った。

「…僕はまだ行けない。」

ここで、やりたいことがあるから。」

「…そっか…」

じゃあ…ここで別れても…また…会えるよね…？」

浩司は笑みを浮かべると、高史の額に軽くチョップを入れた。

「…愚問だよ、高史。」

「…うん…！」

それじゃあ…またね、浩司兄ちゃん。」
「…ああ、またな。」

高史は浩司と別れ、剣汰と春花と共にふたご姫の気球に乗り、おひさまの国に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2783n/>

三剣士の過去

2010年12月8日12時28分発行